

日本古代の「知」の編成と仏典・漢籍

更可請章疏等目録の検討より

中林隆之

Organization of the Knowledge of Japanese Ancient Times, and Buddhist Literature and Chinese Books :
Examination of the Catalogue of Additionally Requested Chinese Classic Books and Commentaries on Han Buddhist Scriptures

NAKABAYASHI Takayuki

はじめに

- ① 更可請章疏等目録の基礎的検討
- ② 更可請章疏等目録の作成意義
おわりに

【論文要旨】

正倉院文書には、天平二十年（七四八）六月十日の日付を有した、全文一筆の更可請章疏等目録と名付けられた典籍目録（帳簿）が残存する。この目録には仏典（論・章疏類）と漢籍（外典）合わせて一二部の典籍が収録されている。小稿では、本目録の作成過程および記載内容の基礎的な検討を行い、それを前提に八世紀半ばの古代国家による思想・学術編成策の一端を解明した。

本目録には、八世紀前半に新羅で留学した審詳所蔵の典籍の一部が掲載されていた。審詳の死後は、彼の所蔵典籍は、弟子で生成期の花厳宗の一員でもあった平撰が管理した。本目録は、僧綱による全容の捕捉・検定を前提として、内裏が審詳の所蔵典籍の貸し出しを平撰の房に求めた原目録をもとに、それを平撰房で忠実に書き写し、写経所に渡したものであった。

審詳の所蔵典籍には、彼が新羅で入手したものが多かった。仏典は、元暁など新羅

人撰述の章疏類が一定の比重をしめた。それらの仏典は、写経所での常疏の書写に先だって長期にわたり内裏に貸し出されていた。内裏に貸し出された中で、とくに華厳系の章疏類は、南都六宗の筆頭たる花厳宗が担当する講読章疏の選定と布施額の調整などに活用された。漢籍も、最新の唐の書籍や南北朝期以来の古本、さらに兵書までも含むなど、激動の東アジア情勢を反映した多様な内容であったが、これらも内裏に貸し出され、国家による諸学術の拡充政策などに活用されたとみられる。

八世紀半ばの日本古代王権は、『華厳経』を頂点とする仏教を主軸においた諸思想・学術の国家的な編成・整備政策を推進したが、その際、唐からの直接的な知的資源の確保の困難性という所与の国際的条件のもと、本目録にみられたものを含む、新羅との交流を通して入手した典籍群が一定の重要な役割を担ったのである。

【キーワード】 審詳、花厳宗、南都六宗、漢籍、新羅

はじめに

正倉院文書中に、『大日本古文書』（編年文書）三が、「写章疏目錄」として掲載し、『正倉院文書目録 三 続修後集』によって、更可請章疏等目録と名付けられた典籍目録（帳簿）がある（続修後集十七、大日古三ノ八四〇九一^①）。小稿は、この目録の作成過程および記載内容を検討することを一つの手がかりとして、日本古代王権による八世紀半ばごろの漢文典籍（仏典・外典とも）の蒐集・捕捉と管理の展開の具体相を示し、それを通して当該期の古代王権・国家が、文字言語にもとづくテクスト群を活用しながら主導した宗教・文化編成策の基本的性格の一端を究明しようとするものである。

古代東アジア地域における中華帝国の圧倒的影響力は言うまでもない。政治―外交や軍事面での影響力はもとより、知識・文化・思想・学術面でもそれは同様である。そもそも漢字という書記言語やその書記方法・様式の伝播そのものも、中国と周辺諸国との力関係を媒介としたきわめて権力的な外交関係が形成される中で伝えられたものであった^②。体系的で論理的な構成をもった長文の書記言語を媒介とした「知」の流れは、基本的には中国で撰述された漢文典籍を周辺国が受容・咀嚼するという形式で進行した。

もともと周辺諸国にとっては、一口に中国文化の受容と言っても、その内実は時間的にも内容的にも一様ではない。それは中国王朝と周辺国との関係のあり方の推移や、周辺諸国同士の関係にも規定され、受容する当該周辺国側の政治的・文化状況や意図に応じて多様なものとならざるをえない。

古代の倭―日本の場合、朝鮮半島諸国との間に中国王朝との関係とは相対的に区別された長期にわたる独自の交流の蓄積があり（韓―倭歴史

的世界^③）、書記言語や書籍・学術・思想などの中国の文化・知識も、六世紀半ば以来、主には百済を中心とした半島諸国を介して受容し、百済滅亡後にも唐に対峙した新羅との交流を通してもたらされてきたという歴史的経緯があった。八世紀以降には遣唐使などを通して、玄奘将来の五千巻余の經典類や古備真備の将来漢籍などに典型的に示されるように、唐の文化・知識が直接本格的に日本に流入するようになった。しかし、学術・文化面では主として半島から受け取った南朝系文化の影響も依然として大きかったことが指摘されている^④。また、法制関連書や学術書にせよ欽定入蔵録の一切経にせよ、唐からの典籍の将来には、様々な制約や困難が伴ったことも論じられている^⑤。さらに将来仏典、とりわけ經典の教的理解に欠かせない章疏類の場合、非漢族の撰述者も一定の比重を占めていたことにも注意が必要である。つまり、当該期の古代国家が受容した知的資源の源泉は必ずしも一様ではない側面がある。

小稿でとりあげる更可請章疏等目録は、天平二十年（七四八）の日付を有し、後述するように大部の章疏類を中心とした仏典と、それ以外の漢籍（外典）をともに含んだ、書籍群の請求に関わる目録であった。そこにみられる典籍の内容も様々である。しかも、この目録の作成過程には僧綱の関与もあったとみられ、そこから国家の仏教事業や思想編成策との関係をうかがう手がかりが得られる可能性がある。したがって本目録は、当該期の「知」の源泉たる書籍群の伝播のありようとその内容の多様性や、それらの所持・管理のあり方の推移、さらにはそれらの国家的な活用などについて考える格好の素材となりうる。

なお本目録については、早くから注目されてきた^⑥。しかし、それは一部を除けば、主としてそこに記載された漢籍（外典）の内容に着目した言及であり、仏典を含めた掲載書籍全体の特徴や目録全体の性格、またその作成契機などを問う研究は、従来、ほとんどみられなかった。近年になってようやく、この目録の基本的性格に関する研究が進展しつつあ

るものの⁽⁷⁾、依然として課題も多く残されているように思われる。

そこで小稿では、まず更可請章疏等目録の史料性格を含めた基礎的検討を行う。これは一見迂遠な作業のように見えるが、この基礎的な検討をすすめる過程で、本目録にうかがえる典籍類の蒐集・保管・貸借・活用の大枠的なあり方や、そこでの王権・国家の関わり方がはじめて明瞭になっていくと思われるので、この基礎作業は欠かせない。その作業を踏まえた上で、仏典とそれ以外の典籍の特徴や両者の相互関係をみすえながらその活用のあり方について検討することで、八世紀中葉の王権主導の宗教・思想・学術に対する政策の解明へ向けての一素材を提供してみたいと考える。

①更可請章疏等目録の基礎的検討

本目録（以下Ⅰ目録と略記する場合がある）は、四紙からなり、冒頭に「更可請」とあって、全体で一七二部におよぶ仏典類およびその他の漢籍（外典）の名を櫃ごとに列挙した目録で、本文末尾に「天平廿年六月十日自平撰師手而転撰写取」とある（紙背は基本的に空、第一紙の端裏に写経所のメモがある）。したがって、作成された（「写取」られた）時点は天平二十年（七四八）六月十日とみてよからう。ただし、さらにその後ろ（最終行）にやや小さな文字で「十九年十月一日佐官僧臨照／大僧都僧行信 此二柱僧岡共知検定」という記載がなされており、前年に僧綱による何らかの検定を経ていることがわかる。なお本目録は、『正倉院古文書影印集成 九』所収の写真で確認すると、この最末尾記載を含めて、全文一筆とみられる。

本目録に収録された典籍のうち、仏典は一二八部五四六卷（複数部数備わる仏典もある。またⅠ64『馬鳴生論疏』は後述するごとく外典なので除外した）で、それ以外の漢籍（外典）が四四部二二二卷（Ⅰ64を加

えた巻数）である。典籍は櫃ごとに収納されており、仏典は九櫃におよぶことがわかる。ただし本目録に掲載されているのは、第四櫃以降の典籍である。これらの仏典・漢籍（外典）を一覧化したものが【表】の「Ⅰ更可請章疏等目録典籍」中の諸記載となる。この【表】でも示したが、四・五櫃が論、六・九櫃が章疏類、そしてその後、櫃名を伴わない外典類が収録されている。

この目録が写経所帳簿群の中に残存していることからみて、これが最終的に造東大寺司管下の写経所によって管理されたことは間違いない。またそこに書き上げられた典籍群も後述するように、写経所と密接なつながりを有していた。では、本目録および本目録に掲載された典籍類は、元来いかなる性格のものであったのであろうか。

Ⅰ目録に掲載された典籍の所蔵主体については、平撰とみる場合がある⁽⁸⁾。根拠は天平勝宝二年（七五〇）十一月付の、造寺司（写経所）が「為用本、暫間奉請」して欲しいとの要請を行った平撰大徳宛の造東大寺司牒（続々修三十八ノ二裏、同四十一ノ五裏、大日古十一ノ四二七・四三〇、以下Ⅱ目録と略記する場合がある）に掲載された典籍名とそれらの並び順が、Ⅰ目録掲載のものとはほぼ一致し、またⅠ目録末尾の目下に、上記したように「自平撰師手而転撰写取」とあることによる。

たしかに造東大寺司牒（Ⅱ目録）は、造寺司（写経所）が平撰大徳の房に写経事業の本経とするための經典の貸し出しを求めた文書である。なお、このときの借用典籍で、末尾に記載された『經典釈文』（Ⅰ28）は仏典ではない。写経所側からの典籍借り受けは、当然ながら常写・間写などの写経事業に関わってなされるので、通常仏典以外は求められない（なお後述）。『經典釈文』は、典籍名に「經典」とあることに引かれて仏典と誤って請求されたものと思われる。そして、この『經典釈文』を含め、Ⅱ目録で平撰に求められた經典の名称や並び順は、いずれもほぼⅠ目録に合致する。またⅡ目録では、Ⅰ目録で「請」「請留」と記

表 更可請章疏等目錄

I 更可請章疏等目錄典籍 天平二十年六月十日 (大日古 3/84~91)					II 造東大寺司牒 (案)平撰大徳房 下勝宝二年十一月 (大日古 11/427~ 430)			III 紫微中台奉請經論疏目錄 天平勝宝四年 (大日古 12/379~384)		
No.	典籍名	帙卷数	請留記載	櫃記載						
					有無	有無, 撰述者名, その他	追筆 (請, 止)			
1	雜集論	一帙十六卷	—		—	—	—			
2	世親撰論	二部二帙卅卷	—		—	—	—			
3	无性撰論	二部二帙二十卷	十卷者請留		—	—	—			
4	地持論一帙	八卷	請留	已上第四櫃	—	—	—			
5	順正理論	七帙七十卷	—		—	—	—			
6	金剛般若論	一帙七卷	—		○	—	—			
7	起信論	三卷	請留		—	—	—			
8	五門実相論	五卷	—		○	○	請			
9	二十唯識論	一卷	—		○	—	—			
10	法花論子注	中卷	—		○	○ 圓弘師	請			
11	涅槃无名論表	一卷	請留		—	○ 肇法師	請			
12	六門教授習定論	一卷	—	已上第五櫃	○	—	—			
13	花嚴孔目	六卷	—		○	○ 儼法師	見請四卷			
14	料簡	一卷	—		○	—	—			
15	伝之記	一卷	—		○	○	止			
16	入法界品抄	一卷	—		○	—	—			
17	涅槃經疏	十六卷	—		○	○ 寂法師	見請六卷			
18	音義同異	二卷	—		○	○	請			
19	抄	二卷	—		○	○	請			
20	剛目	二卷	—		○	○ 元曉師	請 一卷宗要			
21	法花疏	十卷	—		○	○	止			
22	略述	一卷	—		○	○ 元曉師	請			
23	要略	一卷	—		○	○ 元曉師	請			
24	字釈記	一卷	—		○	○	請			
25	料簡	一卷	—		○	○ 義寂	請			
26	玄義	一卷	—		○	○	請			
27	疏談	一卷	—		○	○ 利明	請			
28	疏義記	一卷	—		○	○ 利明	請			
29	上下生	一卷	—		○	○	請			
30	金剛般若經疏	十三卷	—		○	○ 請邁師	請			
31	密嚴經疏	四卷	—		○	○	請			
32	両卷无量寿經宗旨	一卷	—		○	○ 元曉	請			
33	疏	五卷	—		○	○ 寂法師	請 三卷			
34	剛目	一卷	—		○	○	請			
35	記	二卷	—		○	○ 玄一集	請			
36	随願往生經記	一卷	—		○	○ 玄一述	請			
37	勝鬘經疏	六卷	—	已上第六櫃	○	元曉	請			
38	金鼓經疏	十五卷	—		○	○ 八卷金鼓經疏元 曉 七卷金光明疏真 浄三蔵	請			
39	梵網經疏	四卷	—		○	○	止			
40	遺教經疏	四卷	—		○	○	請			
41	維摩經疏	八卷	—		○	○	請			
42	楞伽經宗要	二卷 一卷疏	—		○	—	—			

I 更可請章疏等目錄典籍 天平二十年六月十日 (大日古 3/84~91)					II 造東大寺司牒 (案)平撰大徳房下 勝宝二年十一月 (大日古 11/427~ 430)	III 紫微中台奉請經論疏目錄 天平勝宝四年 (大日古 12/379~384)	
No	典籍名	帙卷数	請留記載	櫃記載	有無	有無, 撰述者名, その他	追筆 (請, 止)
43	疏	十三卷	—		○	元曉師	請
44	仁王經讀述	二卷	—		○	惠浄師述	請
45	如来藏經私記	三卷	—		○	圓光述	請
46	称讃浄土經疏	三卷	—		○	請邁述	請
47	大品般若經料簡	一卷	—		○	○	止
48	大惠度經宗要	一卷	—		○	—	—
49	不増不減經疏	一卷	—		○	○ 元曉師	請
50	理趣經疏	一卷	—		○	○	請
51	般舟三昧經略記	一卷	—		○	○ 元曉師	請
52	瓔珞經疏	二卷	—		○	○	請
53	思益經疏	二卷	—		○	○	請
54	大般若經綱要	一卷	—		○	○ 義寂師	請
55	大品般若經科文	一卷	—		○	○	請
56	金鼓經音義	一卷	—		○	○	請
57	瑜伽論抄	四十六卷	—		○	○ 本立師	請
58	略纂	三卷	—	已上第七櫃	○	○ 義斌師	請
59	起信論疏	七卷	請		—	○	見請三卷
60	新釈記	一卷	請		—	○	止
61	一道章	一卷	請		—	○	請
62	二鄣章	一卷	請		—	○ 元曉師	請
63	私記	一卷	請		—	○	起信論者白紙
64	馬鳴生論疏	一卷	請		—	○	請大納言家
65	大因明論疏	二帙廿三卷章一卷私記	請		—	○ 廿三卷章一卷私記	見請十四卷留九卷
66	小因明論疏	三卷 文軌師	請		—	○ 文軌	止
67	抄	一卷	請		—	○	請
68	撰大乘論抄	四卷	請		—	○ 元曉師	請
69	弁中辺論疏	六卷	—		○	○ 基法師	見請三卷
70	又疏	四卷	—		○	○ 元曉師	請
71	地持論義記	五卷	請		—	○ 苑法師	請
72	初章觀文	二卷	—		○	○	止
73	三論玄義	一卷	—		○	○	請
74	六十二見義	二卷	—		○	○	請
75	掌珍論料簡	一卷	請		—	○ 元曉師	請
76	問答	二卷	請		—	○ 懷威撰	請
77	菩薩本持犯要記	一卷	請		—	○ 元曉師	請
78	大乘觀行問答	一卷	請		—	○	止
79	受菩薩戒法	一卷	請		—	—	—
80	雜集論疏	十卷	請		—	○ 玄軌師	請
81	又記	六卷	請	已上第八櫃	—	○ 玄軌師	請
82	十地論義記	二卷	請留		—	○	請
83	又疏	四卷	請留		—	○	止
84	仏地論述本記	八卷	請留		—	○	請, 止
85	集願文	九卷	請留		—	○	止

Ⅰ 更可請章疏等目錄典籍 天平二十年六月十日 (大日古 3/84～91)					Ⅱ 造東大寺司牒 (案)平撰大德房下 勝宝二年十一月 (大日古 11/427～ 430)	Ⅲ 紫微中台奉請經論疏目錄 天平勝宝四年 (大日古 12/379～384)	
No	典籍名	帙卷数	請留記載	櫃記載		有無	有無, 撰述者名, その他
86	答難顯宗論	一卷	—		○	—	—
87	法花論疏	五卷	請留		—	○	見請三卷
88	大智度論章門	六卷	請留		—	○ 焦撰	請
89	中觀論宗要	一卷	—		○	○	請
90	木叉疏	一卷	請留		—	○	請
91	四分羯摩疏	一卷	請留		—	○	止
92	大乘三藏義	一卷	—		○	○	請
93	仏性論疏	五卷	請留		—	○ 誓法師	請
94	又義	一卷	請留		—	○ 勝庄師	請
95	往生論私記	卷	請留		—	○ 婆藪盤豆	請
96	大乘觀行門	三卷	請留		—	○ 沙弥元曉	請
97	諸經教迹	一卷	—		○	○	請
98	龍樹菩薩和香法	一卷	請留		—	○	止
99	造房記	一卷	請留		—	○	止
100	明大乘理	一卷	請留		—	○	請
101	実相觀	一卷	請留		—	○ 玄聰師	請
102	四品玄章義	一卷	請留		—	○	止
103	内典序	一卷	請留		—	○	止
104	歷代三寶紀	十四卷	請留		—	—	—
105	異部宗論述紀	一卷	請留		—	○ 基師	請
106	一切經要述	一卷	請留		—	○	請
107	能断金剛般若經合論記	一卷	請留		—	○	請
108	安樂集	二卷	請留		—	○ 沙門道悼	請
109	廣百論撮要	一卷	請留		—	○ 元曉	請
110	諸經論序并翻譯時節	一卷	請留		○	○	止
111	曇吉写新章	一卷	—		○	○	止
112	大智度論釈	一卷	請留		—	—	—
113	法苑林章	一卷	—		—	—	—
114	三寶章	一卷	—		○	○	止
115	三藏義	一卷	—		○	○	止
116	顯揚論記	一卷	請留		—	○	止
117	唯識疏私記	二卷	請留		—	—	—
118	和諍論	二卷	請留		—	—	—
119	法界无差別論疏	一卷	請留		—	—	—
120	六現觀義發菩提心義淨 義合	一卷	請留		—	○	請
121	高僧伝要行抄	二卷	請留		—	○	請
122	无量寿經願生義	一卷	請留		—	○	止
123	三具足經翻譯記	一卷	—		○	—	—
124	寶髻經翻譯記	一卷	—		○	—	—
125	真言要決	六卷	—		○	—	—
126	葉婆国達摩菩提因縁	一卷	—		○	○	止
127	序廻論翻譯記	一卷	—	已上第九櫃	○	—	—
128	經典釈文	二十一卷 一帙	—		○	—	—

I 更可請章疏等目錄典籍 天平二十年六月十日 (大日古 3/84~91)					II 造東大寺司牒 (案)平撰大徳房下 勝宝二年十一月 (大日古 11/427~ 430)	III 紫微中台奉請經論疏目錄 天平勝宝四年 (大日古 12/379~384)	
No.	典籍名	帙卷数	請留記載	櫃記載		有無	有無, 撰述者名, その他
129	新修本草	二帙二十卷	—		—	—	—
130	太宗文皇帝集	三十卷	—		—	—	—
131	群英集	二十一卷	—		—	—	—
132	許敬宗集	十卷	—		—	—	—
133	天文要集	十卷	—		—	—	—
134	職官要録	三十卷	—		—	—	—
135	庾(庾)信集	二十卷	—		—	—	—
136	政論	六卷	—		—	—	—
137	明皇論	一卷	—		—	—	—
138	帝曆并史記目錄	一卷	—		—	—	—
139	帝紀	二卷 日本書	—		—	—	—
140	君臣機要抄	七卷	—		—	—	—
141	瑞表録	一卷	—		—	—	—
142	慶瑞表	一卷	—		—	—	—
143	帝徳録	一卷	—		—	—	—
144	帝徳頌	一卷	—		—	—	—
145	讓官表	一卷	—		—	—	—
146	聖賢	六卷	—		—	—	—
147	鈞天之楽	一卷	—		—	—	—
148	十二戒	一卷	—		—	—	—
149	安国兵法	一卷	—		—	—	—
150	軍論斗中記	—	—		—	—	—
151	文軌	一卷	—		—	—	—
152	要覧	一卷	—		—	—	—
153	玉歴	二卷	—		—	—	—
154	上金海表	一卷	—		—	—	—
155	治疵疽方	一卷	—		—	—	—
156	石論	三卷	—		—	—	—
157	古今冠冕図	一卷	—		—	—	—
158	冬林	一卷	—		—	—	—
159	黄帝針經	一卷	—		—	—	—
160	薬方	三卷	—		—	—	—
161	天文要集歳星占	一卷	—		—	—	—
162	彗孛占	一卷	—		—	—	—
163	天官目錄中外官薄分	一卷	—		—	—	—
164	黄帝太一天目經	二卷	—		—	—	—
165	内宮上占	一卷	—		—	—	—
166	石氏星官薄讃	一卷	—		—	—	—
167	太一決口第	一卷	—		—	—	—
168	伝讃星經	一卷	—		—	—	—
169	薄讃	一卷	—		—	—	—
170	九宮	二卷 一推九宮法 一通甲要			—	—	—

- ・ II の「有無」の欄： I と同一典籍の記載がある場合は○、無い場合は—を記した
- ・ III の「有無、撰述者」の欄： 有無は II と同様、撰述者は典籍の撰述者名がわかる場合に記載 内訳を記す場合もある
- ・ III の「追筆(請、止)」の欄： 各典籍に請もしくは止の追筆がある場合に記載 その他の注記情報を記す場合もある

されたものの以外の經典を選んで貸し出しの請求をしたとみられる。したがって、おそらく写経所では、手元にあったⅠ目録をもとにⅡ目録を作成し、平撰の房に本経とすべき經典の貸し出しを要請したものとみてよいだろう。けれどもそれらのことから、Ⅰ目録に掲載された典籍類の所蔵者を平撰とみなすのは、早計と言わざるをえない。

ここで注目すべきは、山下有美の見解である。⁽⁹⁾ 山下はこのⅠ目録の所載典籍を審詳の所蔵典籍とみている。また山下とは別に、大平聡や蔵中のぶも、高橋明子の研究会・学会での口頭発表・レジュメをもとに、高橋説によって、Ⅰ目録掲載典籍類の所蔵者を同じく審詳とみている。⁽¹⁰⁾ ただ、高橋―大平・蔵中は根拠を詳細には示していないので、以下ではまず山下の説を紹介する。

Ⅰ目録とⅡ目録の他に、写経所が天平勝宝四年（七五二）十月二十二日付で「為用写本」に四四〇巻の貸し出しを請求し、紫微中台が同年十一月二日付でそのうち三百六十九巻分を送り出した經典類を列挙した「奉請經論疏目録」（続々修十五ノ六、大日古十二ノ三七九―三八四、以下Ⅲ目録と略記する場合がある）がある。山下は、このⅢ目録も經典の記載内容・並び順からみて、同一の經典群に関わる出納目録と考えられることを指摘した（Ⅰ・Ⅲ目録掲載の經典類の相互関係を示した【表】を参照のこと）。そのうえで、これらの目録に所載された經典類が、いくつかの史料中に「審詳師書類」などと明記されたものや、堀池春峰が指摘した審詳の所蔵經に、装丁・紙色などの体裁も含めほぼ合致していること。また、そこには『造房記』『真言要決』『木叉疏』といった審詳経以外では確認できない稀少な經典も含まれていることなどから、これらの目録に掲載された經典類が審詳の所蔵典籍に他ならないと主張した。

審詳は、周知のごとく新羅で華嚴教学を研鑽した学僧で、『東大寺要録』によれば、東大寺（金光明寺）で最初に『華嚴經』の講説を要請され天

平十二年（七四〇）から三年をかけて講説を実行した人物であった。山下は、平撰は元來は元興寺僧であったが（優婆塞貢進文、統修二十八ノ¹²、大日古二ノ三一七―三一八）、生成期の花嚴宗の一員となった審詳の法系に属する弟子筋にあたる僧で、審詳の死後に審詳経の管理者となった人物であった、と推定した。

審詳の所蔵した華嚴系の章疏類と内容上判断されるいくつかの典籍については、天平末年から勝宝年間にかけての、平撰と内裏および写経所や生成期の花嚴宗との間で頻繁にやりとりされた記録が一部残っている（「經本裝潢充帳」（の一部）続々修十五ノ五、大日古十ノ二七八―二八〇、「僧平撰性泰返抄」続々修十五ノ一〇、大日古三ノ二二〇―二二一、經疏出納帳（の一部）塵芥二十一^③裏、大日古十一ノ二五九など）。他方、のちに審詳経が造東大寺司や東大寺下如法院に管理されるようになって以降、Ⅰ目録所載の典籍類については、神護景雲年間に写経・勘経で活用される審詳経と内容上重なる一方で、それらの經典と平撰との関係はうかがえなくなってしまう。

加えて、山下は明確には指摘していないが、『五門実相論』（Ⅰ8）に注目すべきである。この論典は正式には『十地五門実相論』と称する論典で、後述する「華嚴宗布施法定文案」によると完本は六卷本なのだが、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲいずれの目録でも請求すべき当該論典は、五卷本とされている。そしてⅢ目録で写経所に届けられて以降、天平勝宝六年ごろには四巻分が造書された記録が確認できる（「常疏充書造帳」続々修二十八ノ一七（の一部）、大日古十二ノ三六三）。その後さらに書写が進められたようで、天平勝宝末年ごろに作成されたとみられる「奉写章疏集伝目録」（続々修十三ノ二、大日古十二ノ五二二―五四三）の最末尾付近には、「五門実相論一部六卷」^{欠第五卷本}「百七十四紙」と記されている。ここから、実際には底本自体が欠本であった一巻（第五卷）を除いた五巻分が、百七十四紙で書写されたことがわかる。他方、「經疏出納帳」（続々修

三十裏、大日古三ノ六四二ノ六五六）によれば、写経所は天平勝宝六年八月十二日付の造寺司判官の宣により、「大納言藤原家」へ『五門実相論』五巻を『馬鳴論疏』一巻とともに送っている。その『五門実相論』は「審詳師書」であった（ちなみに『馬鳴論疏』も『五門実相論』と同様、ⅠとⅢ目録にみえる）。つまり、審詳師の所蔵であることが確かな『五門実相論』は、Ⅰ・Ⅲ目録にみえる論典と同じく一巻分欠けていたわけである。そして以後も、写経所の帳簿では当該論典は五巻本としてしか現れない。したがって、そのⅠ・Ⅲ目録で貸し出しを請求された底本は、審詳経とみる以外ないであろう。

よってやはり、Ⅰ・Ⅲ目録に掲載された典籍群は審詳の所蔵であり、Ⅰ・Ⅲ目録でこれらの典籍類の出納を行っている平撰も、山下の指摘通り、Ⅰ（Ⅲ）目録所載典籍の所蔵者ではなく、その管理者であったとみたほうがよい。

以上のごとく、Ⅰ目録所載典籍を審詳所蔵とみた山下の主張は卓見である。ただし、それをふまえつつも、Ⅰ目録そのものの性格、およびそれらとⅡ・Ⅲ目録との関係の理解については、課題も多く残されているように思われる。

山下は、審詳経と推定できる華嚴系の論章疏類十三部が内裏から平撰に請求され、その後返された事例（上記の「経本装潢充帳」（の一部）、続々修十五ノ五、大日古十ノ二七八ノ二八〇と、「僧平撰性泰返抄」続々修十五ノ一〇、大日古三ノ二二〇ノ二二二）があることなどをふまえ、Ⅰ目録を、本来は、平撰（房）が作成した「内裏から平撰のもとに、すなわち東大寺花厳宗のもとに「更に」返却請求するためのリストなのではないか」とみる。そのうえで、末尾の「十九年十月一日佐官僧臨照／大僧都行信、此二柱僧岡共知検定」という記載から、二十年の返却請求の前提として「審詳経自体が十九年十月一日に僧綱二人と共知検定の上で、内裏に渡された可能性は考えられないだろうか」と述べる。一方、

Ⅰ目録に「請」「請留」とある記載については、写経所が平撰から審詳経内の当該典籍を受け取ったことを示す注記とみている。⁽¹²⁾

他方、高橋・大平・蔵中は、山下とはかなり異なる理解をしている。蔵中a論文の注22によれば、高橋はこれを天平十九年の諸寺の資財帳整備に並行して作成されたもので、翌二十年六月十日に写経所が「平撰師」の「手」にある（あるいは手元にある）《原・經典目録》からリストアップした典籍目録と推定している。大平も、Ⅰ目録について、「平撰師の手許にある目録から、あちこち選んで（転撰）写し取ったと解釈される」とし、十九年の僧綱による「検定」については、「奈良の諸大寺では寺史・寺財の調査・報告作業が進められていた。「審詳師」経目録の作成もその中で考えられるべきであろう」とするので、断定はしていないものの、Ⅰ目録を作成した主体は写経所、作成契機は官大寺の資財帳作成とみているようで、ほぼ高橋と同様の理解のようである。なお蔵中は、高橋説に従いつつ、審詳の典籍群は大安寺の経蔵に収蔵されていたとする。

では、いずれの見解が妥当なのであろうか。

Ⅰ目録が、「請」「請留」の注記部分や末尾の署名を含めて全文一筆であったことに改めて注目したい。このことは、写経所に残されたⅠ目録が審詳経に関する何らかの原文書（ないしは帳簿・目録）を参照し、それをもとに二次的に作成された目録であったことを示している。

ただし、Ⅰ目録自体は、高橋も指摘するように、上下二段の折り界を持つ張り継がれた四枚の紙に折り界にしたがって丁寧な書かれている。これは一般の写経所で作成される文書・帳簿にはみられない異例の様式である。しかも『正倉院文書影印集成 九』の実見調査にもとづく解説（39頁）によれば、三紙目の「三蔵義一卷」の記載は、一端高めに不揃いな形で記した同文を擦り消し、わざわざ他の行と高さを揃えるために字下げして書き直されている。また一紙目の「梵網経疏四卷」の「梵」

字も擦り消して書き直されている。紙裏も空である。

写経所の官人が、もともと自身が作成して手もとに有していた元の「更可請」目録から、備忘や控えなどの目的で二次的に全文を書き写す場合、折り界を付け、字配りや文字書体に気を配りわざわざ擦り消し訂正までして書き直すということはほとんど想定しがたい。このことから勘案すると、I目録を、写経所が主体となって「更」に「請」うべき經典を請求するために作成した原目録の写経所自身による写し、とみる見解は成立困難である。

I目録の末尾の天平二十年六月十日という日付記載の下には、「自平撰師手」而転撰写取」とあった。「平撰師」との敬意表現を伴う記載なので、転じ撰して写し取ってI目録を作成したのは平撰自身ではない。おそらく平撰に仕える弟子僧などが、何らかの原本ないし目録を写し取ったものを写経所に渡した（もしくは可能性はごく低いものの、写経所の官人が平撰の坊に出向き、何らかの目録を参照し写し取って作成した）のではない。いずれにせよ写経所では、ここで初めて「更可請」目録（I目録）を入手したとみてよい。そのI目録が、以後、写経所で活用されたのである。

ところで、平撰の房では、審詳所蔵典籍の蔵書目録もしくは貸借に関わる管理帳簿（出納帳など）を備えていたはずだが、そうした平撰房にあった目録・管理帳簿をもとにして、そこから「更」に「請」うべき典籍を抽出する形で、本来写経所のためにI目録が作成された（渡された）と仮定した場合、それは、I目録に、書写の対象となる底本（審詳所蔵典籍）の受け渡し台帳としての役割を果たさせるためと解される。だが、そうだとすると、I目録に仏典とともに多くの漢籍が一括して記載されていることが問題となる。

写経所でも、初期の藤原光明子家管下の写経組織ないし天平初年の皇后宮職系統の写経所の頃には、光明子の意向に基づき、仏典とともに漢

籍類を書写することがあった。しかし、五月一日経の書写事業が開始されて以降は、皇后宮職系統の写経所ないし東大寺写経所で、外典の書写は組織的業務としては実施されていない。無論、当該期の写経所においても、官人らの依頼にもとづいて、『文選』・『維城典訓』といった文学や儒教などの基礎的典籍や、本草書・陰陽書などが書写された事例も散見できる。しかし、それらは写経所の本来の業務ではなく、縁故などによる依頼にもとづいて実施された、ごく小部の私的な書写活動に過ぎない⁽¹³⁾。写経所は、あくまでも常写（疏）や問写といった、皇后宮職系統の国家的写経事業のための官司であった。また、I目録にみえる漢籍類を写経所が書写したような痕跡も、正倉院文書中には確認できない。

これらのことは、平撰房が所持した審詳の蔵書に関する何らかの管理簿の中から、写経所に渡されるべき典籍類を抽出する形で現状のI目録が作成された、とする見方そのものが成立困難であることを示している。つまり、外典を含む審詳所蔵の典籍類を一括して「更」に請求した本来の主体としては、写経所以外の組織を想定する方が穏当なのである。

審詳所蔵典籍を「更」に求めた本来の主体を写経所とはみなせないことについては、I目録中の仏典の動きからも指摘できる。その点について、I目録に付された「請」「請留」などの注記記載の意味をⅢ（やⅡ）目録との関係から考えることで確認し、あわせてそれを通して、「更」に審詳の典籍を請求した主体を明らかにしていきたい。

Ⅲ目録によると、天平勝宝四年十月の段階で、写経所が書写の本経に用いるために請求した經典の大部分について、紫微中台が「請」「止」などのチェックを加えていることがわかる。山下が指摘したように、このチェックは、内裏（広義）が保有していた經典群（審詳経）を紫微中台官人の手で写経所に渡した際に付されたものとみてよい。ここでの「請」は写経所に渡すことを決定した注記、「止」はⅢ目録の時点では内裏（もしくは紫微中台）側に留めておくことを注記した情報と考えられ

る。

だが、Ⅲ目録でこれらの注記を伴うほとんどの伝典は、実は、問題のⅠ目録で「請」「請留」の注記を付されたものとも重なっている〔表〕のⅠ目録所載経典ナンバ―11、59、68、71、75、78、80、85、87、88、90、91、93、96、98、103、105、110、116、120、122の経典群〕。そして、このうち61・64・88・96・105・108・109などの章疏類は、天平勝宝五年四月以降にいたって、ようやく常疏の一環として書写（最終段階の造書）されていることが知られる（「常疏充書造帳」続々修二十八ノ十七、十二ノ三五七―三六三）。

そもそも、Ⅰ目録で「請」「請留」の注記がなされた章疏類が、その時点で写経所に渡されていたとするならば、Ⅲ目録で写経所がそれらを再び本経として請求することなどあり得ない。実際、Ⅰ目録の天平二十年六月からⅢ目録の天平勝宝四年十月にいたるまで、当該の経典類が写経所で貸借・書写されたことを示す記載は、写経所の帳簿中にみられない。写経所では、Ⅲ目録の天平勝宝四年段階までは、常疏の書写対象となる当該章疏群を入手しておらず、書写も完了していなかった。それらは内裏が保有していたのである。

つまり、Ⅰ目録にみられた「請」「請留」の記載は、写経所と平撰坊の間での経典の授受に関わる注記ではなかった。これらの注記は、内裏と平撰坊との間での経典のやりとりに関わる情報記載とみるべきものである。

したがって、天平勝宝二年の牒（Ⅱ目録）で、造東大寺司（写経所）が、Ⅰ目録で「請」「請留」とされたものを除いて平撰に本経請求していたことも、当該経典を既に受け取っていたために請求対象から除外したのではなく、逆に、内裏側に長期に留め置くことが決定されていると写経所が判断した結果、「請」「請留」の記載を伴う経典を除いて、それ以外の典籍を求めたものとみたほうがよい。

次に、Ⅰ目録にみられた「請」「請留」の記載を有さない経典類についてはどうか。

今みたとおり、写経所ではⅠ目録の情報にもとづき、平撰の手元にあると判断して、Ⅱ目録でこれらの伝典の借用を求めた。けれどもⅢ目録以前に実際に写経所に届けられたのは、その内の一部のみであった。具体的には、天平勝宝三年（七五二）二月廿四日付の「平撰師所奉請疏合卅一卷」（塵芥二ノ裏、大日古十一ノ二五九）の内、『金剛般若波羅密破取不壞仮名論』二巻を除いた二九巻分（2・6・12・86・123・124・125・127）である。それ以外の章疏類については、大部分が、Ⅲ目録で「請」もしくは「止」とされているので、ある時点から天平勝宝四年十月までは、これまた内裏側に貸し出されていたことがわかる。¹⁹おそらくⅠ目録が写経所に渡った天平二十年六月以降、写経所がⅡ目録を作成して平撰坊に経典を請求した天平勝宝二年十一月までの間に、内裏側に奉請されたのであろう（Ⅰ目録の作成時点までに、これらの章疏類が内裏に貸し出されなかった事情については判然としないが、その時点では他所に貸し出されていたのかも知れない）。

したがって結局、Ⅰ目録に掲載された経典群は、すべて内裏にもたらされたものであったと推察される。また、先にみた外典類についても、これらの伝典とともに一括して内裏が「更」に請求したものと理解して、何ら問題はない。

以上の考察を踏まえるならば、Ⅰ目録については、そこに記載された典籍を平撰坊から写経所に渡す（写経所が受け取る）ために初めて作成されたものとみえることはできず、むしろ、現状の全文一筆のⅠ目録の原型となるような、内裏が作成して平撰坊に宛てた、原「更可請」目録とでもいうべきもの（以下、原Ⅰ目録と略記する場合がある）が存在したとみた方がよい。すなわち、その原「更可請」目録は、山下の想定とは逆に、内裏が主体となって、以前より借用していた審詳所蔵典籍に加え

て、「更」に借用すべき典籍群を列挙し、平撰房に宛てて請求したものであったと考えられるわけである。

平撰の側は、その時点で貸し出し可能な典籍に添えて原Ⅰ目録を内裏に返した。内裏側では、実際に内裏にもたらされた典籍と原Ⅰ目録とをつきあわせ、受け取ってそのまま留めておくことを決定した章疏名の下に「請」「請留」などと注記したうえで、未だ届いていない章疏をいずれ奉請させるために、改めて原Ⅰ目録を平撰の手元に戻した。その結果、天平二十年六月十日の段階では、原Ⅰ目録は平撰の房が保持していた。このような経緯が想定できるのではなからうか。

そして以上のような経緯をたどった原Ⅰ目録を、天平二十年六月十日の時点で、おそらく写経所の依頼に応じて平撰の弟子僧が平撰の坊にて転写した。写経所はそれを入手して、その後、Ⅱ・Ⅲ目録による審詳所蔵章疏類の貸し出し請求のための基礎台帳として活用した。これが現存のⅠ目録であろう。

審詳経は、華嚴系の經典類の事例でも示したように、この原「更可請」目録が作成される以前より頻繁に内裏に貸し出されていた。したがって、たしかに山下が指摘するように、内裏では審詳所蔵典籍のすべてを把握し借用しようとしていたとみられる。ただしⅠ目録の最末尾にある「(天平)十九年」付けの僧綱二員による「共知検定」の記載は、すべてを内裏に渡す際の「検定」とみるよりは、むしろ原Ⅰ目録の作成に伴って(もしくは内裏での典籍の授受とそれに連動した原目録への「請」「請留」の注記時に)なされたものとみるべきではないか。しかし、いずれにせよ、審詳所蔵典籍の内裏への奉請に僧綱が関与していることは、きわめて重要である。

ちなみに、このときの「共知検定」は、大きな視野からみると、大平らが指摘したように、官大寺の資財帳作成の動向とも無関係ではないかもしれない。ただ注意したいのは、寺院資財と僧尼の個人蔵書とは明確

に区別されて管理されていたということである。⁽¹⁵⁾ 審詳所蔵典籍の網羅的な掌握は、山下が指摘するとおり、直接的には審詳の死去を契機とするものとみるべきで、これを先駆として、天平勝宝三年ころ以降、本格的に多くの学僧の私持経の探索がなされていくとみられる(なお後述)。また審詳の死去後は、審詳の典籍の管理は平撰の房でなされた。平撰はもともとは元興寺僧であり、のち金光明寺(東大寺)へ遷った審詳の弟子筋にあたる人物であった。審詳経は、すでに天平十九年十月以前までには、生前の審詳がかつて止住した大安寺の住房から、金光明寺に遷った平撰のもとに移管されていたとみるべきであろう。

②更可請章疏等目録の作成意義

前節の考察の結果、更可請章疏等目録(Ⅰ目録)が、審詳所蔵典籍の一部を貸し出し請求するための目録の写しであったことが判明した。またそれによれば、審詳所蔵の典籍は、審詳の生前より内裏に貸し出されていたが、彼の死後には平撰の管理の下、天平十九年十月までには僧綱の検定を経て、内裏に全容が掌握され貸し出されていたとみられる。なお、審詳の典籍の授受に関わるⅠ・Ⅲ目録は、いずれも最終的に写経所に置かれ、常写(疏)に際しての請本台帳などとしても活用されていた。以上のことから、いくつかの解明すべき課題が浮かび上がる。まず、審詳経が原Ⅰ目録で請求されて以来、大部分の經典が内裏に長期にわたって貸し出され、それが常疏よりも優先されていた。それはいかなる理由によるのであろうか。また、Ⅰ目録には仏典に加えて漢籍(外典類)なども含まれていた。そのことはいかなる意味を持つのか。審詳がそれらを所蔵していたことやその入手経路が問題となろう。さらに内裏が外典の貸し出しを要請したことについても、その意味について考える必要がある。本節ではこれらの諸点について検討してみたい。

(1) 南都六宗の整備と審詳経

I目録によれば、審詳所蔵の典籍は、天平十九年までには僧綱による「共知検定」がなされ、順次内裏に貸し出されていた。このことは、内裏の典籍貸し出しの意向が、僧綱の動きとも深く関わった公的な宗教(仏教)政策に連動していることを示している。

この点では、天平十二年(七四〇)に、聖武・光明子・阿倍内親王が河内知識寺に行幸し知識盧舎那佛像を拝したのち、大仏造立への動きに合わせて『華嚴経』への関心を高め、その天平十二年以降、金鍾寺で講説が始まったとみられることが注意される。

堀池春峰が指摘したように、『東大寺要録』巻第五諸宗章第六「華嚴宗」所引の「東大寺華嚴別供縁起」によれば、同年の聖武四十歳の満賀で、良弁が「奉」為聖朝」に、審詳を招請し絹索堂ではじめて三年間にわたる旧訳『華嚴経』六十巻の講説を始めたといひ、その初講の際には聖武・光明子らも臨席して多くの御衣や綵帛を施入したという。⁽¹⁶⁾そして以後講師を交替しながら天平二十一年(七四九)まで旧訳『華嚴経』六十巻を中心とした講説が続けられたとされる。また天平十六年(七四六)には聖武が「降」勅百寮」し、「知識花嚴別供」を開催して二百町余の水田を施入したという。

これらの『華嚴経』講説については「正史」にはみえない。しかし先学が指摘するように、この部分の『東大寺要録』の記載は、普機撰の『華嚴宗一乗開心論』にもとづき書かれたものとみられる。⁽¹⁷⁾『華嚴宗一乗開心論』は、天長七年(八三〇)に勅命を奉じて撰進された「天長六本宗書」の一つなので、まったく根拠のない記述をしたとは考えがたい。とすれば、とくに大仏建立事業の展開に伴って、天平十六年ごろより財源の付与を伴う国家的規模の『華嚴経』講説が模索されはじめたという記載には、一定の事実が反映しているとみてよいだろう。当初の官人を巻き込

んだ「知識」形式の『華嚴経』の供養会は紫香樂での大仏建立の頓挫によって再編された可能性があるものの、それは金光明寺(東大寺)での建立再開とともに、『要録』で「華嚴別供」と称された天平十二年以来の供養会を発展させる形をとって継承されたのではないか。堀池のいうとおり、天平二十年九月九日付の牒で確認できる「花嚴供所」(寺華嚴疏本并筆墨紙充帳)(その冒頭の「花嚴供所牒」)続々修六ノ一、大日古十ノ八二ノ八三)は、この「別供」のための組織で、おそらくこれが花嚴宗の母胎となるのであろう。

その後、生成期の花嚴宗のメンバーを中軸としつつ、さらに天平感宝元年(七四九)閏五月二十日の聖武の詔(『続日本紀』)にもとづき、十二の官大寺への莫大な財源を付与した「花嚴経為本」の一切経転読講説体制と南都六宗の整備へと発展していくことになる。天平十六年ごろ以降、華嚴系の經典類をはじめとして大量の經典・章疏類が内裏に奉請されていくのは、まさにこうした体制整備の過程に深く関わるものと考えられる。そしてその際重要な役割を果たしたのが、他ならぬ審詳経であった。以下確認しよう。

花嚴宗の講読担当經典類とその講説に際しての布施額を定めた「華嚴宗布施法定文案」(続々修四十一ノ二、大日古十一ノ五五七ノ五六八)は、別稿で指摘したとおり、生成期の東大寺花嚴宗が、聖武の詔をふまえた僧綱(とくに良弁)と大修多羅衆の統括の下で作成した、天平勝宝三年五月二十五日付の経論部を列挙した解案と、その後日付を伴わない章疏部の担当經典類を列挙した目録を貼継いだものである。僧綱に上申するために作成された帳簿の下書きとみられる。⁽¹⁹⁾

その章疏部には、I目録中に確認できる『不増不減経疏』(I49)、『十地五門実相論』(I8)、『一道章(二道義章)』(I61)、『二障章(二障義章)』(I62)、『華嚴孔目』(I13)が記されている。これらの論章疏類は、いずれもIII目録で「請」とされ、写経所が本経として入手したのが、天平

勝宝四年十月以降であったことがわかる。このうち『一道章』は、天平勝宝五年（七五三）閏十月二十日に仕上げの装丁がなされている（「常疏充書造帳」続々修二十八ノ一七、該当部分は大日古十二ノ三六二）、「不増不減経疏」と『二障章』については、その後史料に現れず、常疏としての書写がなされたか否かも不明である。その後、神護景雲二年（七六八）には造寺司が管理した「審詳経」が内裏系の奉写一切経所へ奉請されている（「一切経奉請文書継文」続々修十七ノ八、大日古十七ノ一一七、一四二）。智嚴撰の『華嚴孔目』は、すでに天平十六年（七四四）の時点で常疏の一環として装丁されている（「常疏充裝潢」続々修二十八ノ五、大日古八ノ三三八、三五〇）。しかし、その本経が再び求められ書写されたのは、当初入手したテキストに何らかの不備があったからかも知れない。Ⅲ目録によれば、写経所は審詳経のうち四卷分を紫微中台より受け取っている。さらに『十地五門実相論』は、上記したとおり天平勝宝六年（七五四）ごろに四卷分が造書された記録がある（大日古十二ノ三六三）。このように、以上の章疏類はⅢ目録で写経所が請求した天平勝宝四年十月以後に、写経所に回され書写されている。

他方、『華嚴宗布施法定文案』は天平勝宝三年には作成されているが、今見た經典類を含め、それには各経論章疏テキストの書写枚数のみならず、講読の際の講師・読師らへの布施額が、一部あたりの内容（紙数）が多いものの場合には単独で、短いものは複数の經典をまとめて記されている。上記のうち『十地五門実相論』は、百二十張分について単独での布施額八貫が記されていた。『不増不減経疏』は、『楞伽経疏』一部五卷、『四卷楞伽経科文』二卷、『四卷楞伽経抄』二卷、『如来蔵経疏』二卷とあわせて、計十二卷三八二張分で、講師料が錢二十五貫。『一道章』一卷と『二障章』一卷は、『十門和諍論』二卷、『大乘止観論』二卷と合わせて、計七卷二六〇張分で二十五貫となっている。なお、『一道章』『二障章』『華嚴孔目』などの記載順序には変更が加えられている。これはセットで布

施勘定される經典グループの、講説をふまえた調整（変更）の結果が反映したものとみられる。また『十地五門実相論』も当初は布施額が九貫とされていたが、ミセケチで八貫に訂正されている。これも実際に講説した結果の変更とみられる。布施対象の紙数は「一百廿張」とあるので、この法定文案を作成した段階では、作成者たる生成期の花嚴宗は、まだ五卷分（「百七十四張」分）すべてのテキストを入手してはいなかったことがわかる。布施額の調整はこの四卷分についてのものである。

以上のことは、「華嚴宗布施法定文案」が、写経所に渡される以前に、実際に講読した結果をふまえて作成されていたものであることを、如実に物語っている。そしてこれらの講説対象となった稀少な章疏類は、この時期内裏が保有していたⅠ目録所載のもの以外には、神護景雲年間の上記の帳簿に記された審詳所蔵經典以外にはみあたらない。とすると、その講説に際して使用されたのは、やはり審詳経（もしくは、それを本経とし内裏系の写経司などで新写され花嚴宗が所持した論章疏²⁰）とみるのが妥当であろう。

つまり、内裏方面に渡された審詳経は、僧綱の検定を経た上で、南都六宗の整備事業のために活用されたために、長期にわたり内裏側にとどめられていたわけである（この他、審詳書中に見える『花嚴疏』や『起信論疏』なども、早くから内裏で講説対象とされていたので、これも花嚴宗の整備の初期の段階で活用された可能性が高いだろう）。なお残念ながら史料上は明確に確認できないが、花嚴宗のあり方から推測するに、他の宗の担当論・章疏の場合も、同様に活用された可能性は十分に想定できる。

別稿でみたとおり、大仏開眼を間近に控えた天平勝宝三年には、南都六宗の整備の過程で智憬らが盛んに僧侶・寺院所蔵の章疏類を探し求めていた²¹。花嚴宗の創設を準備し第一回の『華嚴経』講説（花嚴別供）の講師を担当した審詳の所蔵典籍の活用は、そうした動きの先駆的事例と

考えられる。

なお堀池春峰が、審詳が新羅に留学した学生であったこと、審詳の所蔵経には、元曉・義湘・大行・義寂・玄一・璟興などの新羅僧の撰述した論章疏類がかなりの比重を占め、そのテキストの料紙も半島のものに特徴的な白紙のものが多いことなどから、審詳経の多くは審詳が新羅で入手（もしくは書写）したものであったと指摘している⁽²²⁾。

これらの事実を勘案すると、南都六宗の整備にみられる『華嚴經』・花嚴宗を中軸とした仏教教学の国家的編成に果たした審詳経、とくにそこにみられる新羅經由で将来された論・章疏類の果たした役割が一定の比重を持っていたことがわかる。また審詳経は、八世紀後半の写経・勘経事業に際しても活用されていた。I目録所載のものを含めた審詳経は、八世紀の仏教政策に長く意味を有した經典群だったのである。

（2）漢籍（外典）の所持と内裏

次に、I目録には九櫃の仏典の後に漢籍などが列挙されていた。したがって、審詳は数多くの漢籍類を所蔵していたことになる。この問題について考えてみよう。

まず、審詳は漢籍類をどのようにして入手したのか。

「日本書」と注記された『帝紀』二卷（I 139）は、当然日本で入手したものである。年月日不詳の阿刀酒主の注文に「審詳師目録一櫃、并彼写疏目、今有^レ可^レ見、宜付^二此使^一」とある。「彼写疏目」と記されているので（「阿刀酒主写疏目録奉請文」続々修十六ノ四、大日古十三ノ三九）、審詳は自身で書写した疏も有していたことがわかる。同様のことが仏典以外にも想定できるとすると、このような和書が該当する可能性がある。

だが『帝紀』以外の典籍は、いずれも漢籍であった。その入手経路は直接は不明と言わざるをえないが、仏典と同様、新羅からの将来が想定

できるのではないか。

遣唐使の公的な将来文物については、国家・王権がその品目・数量などををただちに掌握したとみてよい。冒頭でも触れた、玄昉や吉備真備がもたらした經典・典籍類が国家的に活用されたことに、それはよく示されているよう。一方、市などで売買されて社会的に流通した唐文物もあったであろうが、その場合も、貴重な最新文物は、国家が先買することとなっていた（養老関市令8官司条など）。このことからすると、仮に審詳が社会的に流通した唐からの将来典籍類を何らかの手段で入手していたとしても、それらのテキストを先に内裏が入手していないことは、まず想定しがたい。

ところが、内裏は審詳の死去後に、問題の漢籍を原「更可請」目録によって、平撰の房へ貸し出し請求していた。この事実、その請求の時点、内裏がI目録に所載された漢籍をほとんど所持していなかったか、もしくは仮に所持していても欠本や内容に欠落があるものなど不完全なものが多かった、といった事情があったことを強く示唆している⁽²³⁾。そして実際、I目録にみられた漢籍のうちで、天平十九年の「共知検定」以前に、国家が所持していたことを確認できる書籍はほとんどないのである⁽²⁴⁾。

審詳の所蔵典籍には、後述するごとく、貴重なものが多かったが、彼自身には渡唐の経験はなかった。また今みたように、彼が社会的に流通した遣唐使将来の唐書を内裏に先んじて入手することも考えがたかった。とすれば、その入手経路は、やはりほとんどの場合、彼の留学先であった新羅經由とみておくのがもっとも穏当なのではなからうか。

それでは、審詳の所蔵した漢籍は、具体的にはいかなる性格のものなのか。諸先学が本目録掲載の漢籍について、『隋書経籍志』、『旧唐書経籍志』、『新唐書芸文志』、『日本国見在書目録』などとの関係を整理している⁽²⁵⁾。以下、個々の典籍に即して、諸先学の指摘に学びながら、将来のあり方の問題についても折に触れて言及しつつ、みていこう。

審詳は128『經典釈文』や152『要覽』といった儒学系の書物を所持していた。当該期の僧侶の知識の指向が、仏教系のそのみに限定されなかったことがよく示されている。そもそも、中国・朝鮮半島で撰述された章疏類には外典類を引用している著作も多い。それらは仏教と、儒教や後述する天文説・陰陽説・五行説といった古典的な中国文化との、緊張・対立や妥協も含む長期にわたる交渉と融合の過程を経て形成された、東アジア地域に通有した知識体系の特質の一端といえる。審詳が儒教系典籍を保持するのは、おそらくそうした章疏類を含めた諸文献の学習に伴う諸知識の吸収の帰結とみられる。なおこうした姿は、諸先学によって指摘されているように、仏教・儒教の思想・知識・学術とともに兼ね備えた、山上憶良・吉備真備・石上宅嗣・文室智努といった当該期の代表的知識人の思想動向とも、概ね共通する姿と言えよう。⁽²⁶⁾

次に、本目録には、130『大宋文皇帝集』・131『群英集』・132『許敬宗集』・135『庾信集』といった詩文集や、143『帝徳録』などの成句集がみられる(141『瑞表録』・142『慶瑞表』・144『帝徳頌』・145『讓官表』も成句集の可能性がある)。当該期の留学僧は、仏教を軸とした広義の外交主体でもあったので、漢文を駆使した作詩・作文の知識・教養は必須であった。七世紀後半に「呉」に渡ったことで知られ『懷風藻』に詩を残した智蔵や、のち九世紀初めに多数の詩文・書簡を作成し、仏書のみならず中国の詩文集をも蒐集・編集(『文鏡秘府論』)した空海の事例に典型的にみられるように、作詩・作文の教養は、俗人をも含めた広義の外交交渉・国際的な交友関係(「師友・同学」関係)の構築に、大きな意味を持ったであろう。⁽²⁷⁾ 円仁の「慈覚大師在唐送進録」・「新入唐求法聖教目録」や円珍の「福州温州台州求得経律論疏記外書等目録」に、それぞれ詩文を中心とした将来された外書がみられるのも(ともに『大正新脩大蔵經』巻五十五所収)、国際的な交渉の広がり念頭に置いたものと考えうる。こうしてみると、八世紀はじめごろに新羅に渡った留学僧たる審詳が漢

籍詩文集・成句集・書儀類を持つのも、重層的な古代東アジア地域世界の中で、俗人をも含んだ交友関係を伴って活動した知識エリートにふさわしい姿であったといえよう。

一方、審詳の典籍中には、医学・薬学系の書籍もみられる。129『新修本草』・155『治癰疽方』・156『石論』・159『黄帝針経』・160『薬方』である。このうち129『新修本草』は、唐の顕慶四年(六五九)に蘇敬が撰したもので、延暦六年(七八七)五月に至り旧来の陶隱居集注『本草』に加えて採用されたものであった(『続日本紀』延暦六年五月戊戌条⁽²⁸⁾)。審詳は、すでにこの最新の薬方書を独自に入手していた。

僧尼令でも僧尼の医療行為は認められており、中には鍼灸や薬方に関わる知識などにより、看病禪師となつて内裏に出仕したものもいた。そのために必要な知識は、臨床による実修を除けば医薬系の典籍にもとづく部分が大きかったであろう。関連して言えば、『新撰姓氏録』左京諸蕃下(漢)によれば、和薬使主氏の祖先たる智聡は、欽明朝に大伴佐豆比古に従い「内外典・薬書・明堂図等百六十四卷、仏像一軀、伎楽調度一具等」をもって入朝したという。また孝徳朝にも「本方書一百卅卷、明堂図一、薬臼一、及伎楽一具」を智聡の子善那が牛乳とともに献上し、和薬使主の氏名を賜ったとされる。そして『新撰姓氏録』編纂の九世紀前半時点で、それらの請来品は「今」は「大寺」にあるという。この事例にみられるように、六・七世紀以来、渡来系の氏族や僧らが、主に朝鮮半島諸国より盛んに内外典をもたらし、個人が私蔵したり、その後官大寺などに収蔵されたりしている。審詳の有した医薬書も同様の流れの中で、新羅から持ち帰ったのではないか。

また六世紀半ば以来、百濟僧觀勒の事例(『日本書紀』推古十年十月条)に端的に示されるように、倭国にも朝鮮半島諸国の僧らが渡来し、仏典のみならず儒学系書物や、暦本・天文地理書・通甲方術書などももたらしていた。⁽²⁹⁾ 審詳が天文書や占術書を所蔵していたのも、そうした六・七

世紀以来の歴史的動向からみてうなずける。審詳の有した133『天文要集』・161『天文要集歳星占』・162『慧学占』・166『石氏星官簿』は天文書であることが知られ、165『内宮上占』や168『伝讀星経』も、書名からみてその可能性を推測できる。また167『太一決口第』・170『九宮』は五行に関する書に分類されている。僧尼令1上観玄象条、同2ト占吉凶条で、僧尼が天文を観察したり占術により吉凶を占うことが禁止されていた。しかしこれは裏返せば、僧尼らがこれらの知識を豊富に有していたということになる。僧尼令の条文は唐の道僧格をモデルにしたもので、唐でも僧尼の動向へのチェックはもちろん、これらの書物の流布も統制されたと想定され、古代日本での社会的流布もきわめて制限されたと考えられるが、審詳はこうした典籍も私蔵していたわけである。

さらに注目されるのが、兵書の所蔵である。『日本国見在書目録』では149『安国兵法』と164『黄帝太一天目経』は兵家に分類されている。148『十二戒』も『日本国見在書目録』にみえる「軍戒三卷」がその一部だとすれば、兵書ということになる。150『軍論斗中記』も、書名から兵家部の可能性が推測できる。これら兵家の書籍は謀反・反乱を防ぐ意図からも取り扱いが厳しく制限されたはずである。したがってこれらの書物が、遣唐使を通じて唐から直接もたらされ日本社会で流通していたものを、審詳が入手もしくは書写したとは考えにくい。他方、七世紀後半以来、唐と半島諸国との間には戦争を含む厳しい外交関係が持続していた。その中で滅んだ高句麗・百済の僧の中には、対唐戦争を主導した者もいた（『旧唐書』東夷百濟・高麗所載の百済僧道琛と高句麗僧信誠）。百済・高句麗が滅んだ後も七世紀末まで唐と新羅の緊張関係は続いたが、その間、倭―日本と新羅との関係は一時期を除き概ね良好で、そうした関係は八世紀第一四半世紀ごろまで維持されていた。こうしてみると、審詳がこれらの兵書を入手したのは、やはり留学先の新羅において、とみておくのがよいのではないか。

ところで、別稿で指摘したように、僧尼が私蔵した經典類は、通常秘蔵され、容易には他者にみせなかつた。⁽³⁰⁾審詳の場合、遣新羅使に同行した留学生であつたので公的な性格を有していたはずであり、且つ所蔵典籍は九櫃以上にわたる膨大な巻数であつた。正確には不明だが、その内かなりの部分を将来典籍が占めたと考えられる。

けれども彼の生前は、その膨大な典籍群の全容は、完全には把握されていなかったのではないか。審詳の死（最後に生存が確認できる天平十六年八月以降で、山下の指摘する僧綱の「検定」がなされた同十九年十月以前であろう）に伴い、その蔵書は生成期の花厳宗の一員と思しき平撰の房で管理されたが、僧綱の「検定」による所蔵典籍全体の捕捉とそれを踏まえた内裏への貸し出しは、その段階に至ってようやくなされた。原I目録作成にあつた「検定」もその一環であつた。

なお審詳の所蔵典籍は、仏典は常疏の書写事業での活用の後、最終的にはすべて造東大寺司で保管された。外典については詳細は不明だが、I目録に収録された『馬鳴生論疏』（I 64）について、東大寺僧で良弁の信任の厚い（花厳宗）智憬が写経所への天平勝宝五年八月十二日付の書状で、『十一面経疏』一卷とともに返送した際に、「右、馬鳴論疏、今は外書耳、乞照此状、勿撰内書、恐後代濫哉」として、仏典と区別しておくようにとの指示を出している（『僧智憬論疏奉送啓』続々修十六ノ七、大日古十三ノ二一―二二）。このことからすると、やはり外典も、このころまでには造東大寺司―写経所で、審詳所蔵典籍として一括して管理されたように思われる。

さて、内裏―僧綱による審詳の典籍の「検定」と貸し出しは、それらの書籍の国家的な利用や、閲覧・利用の制限をも含む管理を可能にする。漢籍の場合、もともと図書寮が多くの典籍を有していたはずである。しかしI目録によると、審詳は『隋書経籍志』・『旧唐書経籍志』・『日本国見在書目録』にも確認できない稀少な典籍を有していた。内裏がこれら

の典籍の貸し出しを要請したのは、そうした稀覯本（テクスト）の国家的蒐集という意味もあったのではないか。また、上記したように本目録には詔勅表啓などの文書類を作成するための実用書類（成句集）もあったので、そうした政務書類作成の参照資料として必要とされた可能性もあるう。

加えてそれは、先にみた当該期の王権が主導した、仏教を軸とした思想・学術政策とも無縁ではなかった。聖武は、天平六年（七三四）の時点で、内裏系の写経所による一切経書写事業の書写經典の跋文で、「朕以三万機之暇、披覽典籍、全身延命、安民存業者、經史之中、釈教最上、因是仰憑三宝、帰依一乘、敬写一切経、……」と述べている（『聖武天皇勅旨写経御願文』（観世音菩薩受記經奥書、大日古二十四ノ四五）。ここから、聖武が、政務の合間に諸典籍を広く読み進め、このころまでに、様々な舶載系の典籍に見られる諸思想・知識（『經史』）の中で、自身の「全身延命」と統治下の人民の「安民存業」のためには、仏教（とりわけ、のちの「花嚴経為本」）につながる「一乗」系の教学が「最上」であると認識するにいたり、一切経を書写してその普及に努めようとしていたことがわかる⁽³¹⁾。

一方、すでに天平二年（七三〇）には、大学寮の学業優秀な学生（得業生）への時服・食料などの支給とともに、陰陽・医術・七曜・頒曆などの博士ら七名に、それぞれ弟子をとって学業を伝習させること、また漢語生も養成することなどが決定されている（『続日本紀』天平二年三月辛亥条）。このように、この時期王権は仏教政策を推進していくとともに、その他の国家運営を支えるための諸学術を備える人材の拡充のための施策も行っていた。聖武の天平六年の一切経での跋文は、こうした動向の進展を踏まえた上での諸思想の価値的序列付けの意向を示したものであったと理解される。

玄昉将来の唐本にもとづく光明皇后発願の一切経「五月一日経」の書

写事業とその後の章疏類を含めた書写対象の拡充、さらにそれらを前提とした南都六宗や「花嚴経為本」の一切経講読体制の整備事業は、当然ながら、天平六年の聖武の意向の延長線上にあるものといえてよい⁽³²⁾。その常疏や南都六宗の体制的整備のために、原「更可請」目録により審詳経が内裏にもたらされ、積極的に活用されていた。そしてその際、目録による外典の内裏への貸し出しもそれに並行して僧綱の手による「検校」を経て実施されていた。とすれば、外典の貸し出しもそれらの動向に連動した動きとみるのが自然であろう。

審詳の所蔵典籍中には、諸学術を担う人材の養成・拡充政策のために必要な知的源泉となる貴重な学術書が豊富に含まれていた。僧綱による「共知検定」を経た内裏への外典類の奉請により、国家は外典類も僧侶個人の私蔵するものをふくめ意識的に捕捉・蒐集はじめ、それを当該期の国家的な宗教・思想政策とも連動させようとしたのであろう⁽³³⁾。

以上のごとく、聖武の諸思想による価値的序列付けの意向は、「一乗」説を代表する『華嚴経』を最重視し、それを中核とした章疏類を含む一切経の教説を分担講読しその教学を普及する中央学侶集団たる南都六宗を整備するのみならず、他の「經史」類をその下位に序列付けつつその多様な学業を担う人材を養成し、当該期の社会全体の「知」＝思想・学術・文化体系の編成をめざしたものと展開したと考えるのである。

八世紀半ばの日本古代王権は、東アジア地域に通行する漢文典籍を主要な源泉とする思想・学術・文化的価値の大枠での共有を前提に、それを仏教を中核において統合し序列づけようとした。更可請章疏等目録に掲載された審詳所蔵典籍類は、そうした王権主導の思想編成策の一端を担ったわけである。

おわりに

更可請章疏等目録の検討は、古代日本における体系的文字言語を駆使した漢訳仏典・漢籍類の伝播のあり方や、その管理と活用のある方の一端を具体的に示してくれた。

目録に掲載された諸典籍は、新羅留学僧の審詳が生前所蔵していたものであった。それは章疏類を中心とした仏典類と外典よりなるが、その多くは彼の新羅留学によって将来されたものと考え得る。審詳の所蔵典籍は、彼の死後は弟子とみられる平撰が管理したが、それらは僧綱の検定によって全容が把握され、その結果、内裏・写経所などで活用されるにいたった。更可請章疏等目録は、その審詳の所蔵典籍の借用を求めた内裏による請求文書を写して写経所に渡されたものであった。またそれは南都六宗の整備や諸学業の整備政策にも活用されたと考えられる。

波及する問題について簡単に言及することで小稿の結びにかえたい。

検討の結果、改めて垣間見られたのは、日本古代王権が東アジア地域に広がる「知」の源泉を獲得するにあたっての新羅の位置の重要性と、その新羅経由でもたらされた知識の内容の複合的な性格であろう。

八世紀中葉の古代王権が、巨視的には唐帝国の宗教・学術政策の枠組みを模倣しようとしたことは間違いなく、典籍の蒐集にあたっても最新の唐の典籍を強く希求したことは疑いない。だがその大枠を踏まえながらも、当該期には新羅からの将来典籍の果たした役割が大きかったことも忘れてはならない。

とりわけそれは仏教、とくに新羅王権が重視した『華嚴経』を中心とした仏教教学の習得と、南都六宗という中央学侶集団の国家的編成に大きな意義を有した。近年、東大寺聖語蔵に遺存する新訳『華嚴経』が新羅経であることが解明され、新訳『華嚴経』の新羅からの伝来を推定し

た堀池春峰のかねての主張が裏付けられる形となった。⁽³⁴⁾ また大谷大学所蔵の「内家私印」(藤原光明子家の印)が捺された元暁撰『判比量論』に、新羅僧もしくはその関係者による角筆の読みが付されていたことも明らかにされ、これが以後の日本での漢文読解・訓点へ影響を及ぼしたことが指摘されている。⁽³⁵⁾ いずれも仏典を駆使した仏教教学の学習と読解(講読)の過程に果たした新羅系典籍の役割の大きさを示すものであり、小稿で指摘した審詳典籍の南都六宗の整備に果たした活用のあり方とも実に整合的である。

仏典以外の漢籍類の場合も同様の傾向をもつ。内裏が請求した審詳の所蔵典籍には、『新修本草』などの最新の唐代の書籍とともに南北朝以来の古文系の典籍も一定の比重を占めていた。この点では、聖武が天平三年に書写した『雑集』に収録された詩文の性格と重なり合う部分がある。『雑集』でも、新しい『鏡中釈霊実集』とともに、彦琮撰とされる『隋大業主浄土詩』、陳の僧真観の『真観法師無常頌』、北周の『周趙王集』、観行内雜詩』といった、隋や南北朝期の詩文など唐代以前の古詩も多数書写されているからである。『雑集』には親本があり、聖武はその親本を書写したとされているが、⁽³⁶⁾ その親本が書写対象とした典籍の入手経路が新羅経由であった可能性も、十分考慮すべきであろう。

唐からの直接的な知的資源の確保の困難性という所与の国際的条件のもと、日本古代王権が常に意識したのは、唐との関係でいえば同じく周辺国同士でありながらも、冊封をうけ唐と緊密な関係を築き上げていた新羅の動向であった。新羅に対する日本王権の外交的態度は、大國主義的であり、その結果、天平期以降には危機をはらむ局面もあった。が、大仏開眼に際しておそらく日本側の招請に応じて来日した金泰廉ら一行が、大仏に『法華経』・『梵網経』・『頭陀经』を献納するとともに(「自所々請求経帳」続々修十五ノ八、大日古十二ノ二八七・二九三(該当部分は十二ノ二八八・二八九)、日本側に見せつけるかのごとくそれらの仏典

を含む大量の文物を将来し、貴顕らがそれを買いたった状況にも示されるように、日本王権は、八世紀中葉の時点でも、舶載の文化・思想・学術の導入の面などでは新羅に依存する部分が大きかった。⁽³⁷⁾そして、新羅經由の舶載典籍は、唐の最新の書籍のみならず、南北朝期以来の古文系のものや、新羅人の手になる撰述書も一定の比重を占めていた（とくに元暁の章疏類が重要である）。日本古代王権は、新羅を介して入手したそうした複合的な性格をも含んだ仏典・漢籍類を活用しながら宗教・学術編成策を推進した。⁽³⁸⁾審詳の典籍群とその目録（更可請章疏等目録）は、その際重要な役割を果たし、以後の古代国家の思想政策の枠組みを規定していくこととなったのである。

註

- (1) 正倉院文書の帙巻数『大日本古文書』（編年文書）の巻頁数を示した。以下、正倉院文書の場合、同様の形式で示す。
- (2) 西嶋定生「序説―東アジア世界の形成」西嶋定生著・李成市篇『古代東アジア世界と日本』岩波書店、二〇〇〇年、初出一九七〇年。西嶋氏の冊封体制論・東アジア世界論については、近年様々な批判がなされその見直しが進められている。ただし、こうした文字言語（漢字）と政治・外交とに関わる大枠的な観点自体は、依然として有効であろう。
- (3) 山尾幸久「倭王権と加羅諸国との歴史的関係」『青丘学術論集』一五、一九九九年を参照。
- (4) 東野治之「美努岡万墓誌の述作―『古文孝経』と『論語』の利用をめぐる―」同『続日本紀』所載の漢文作品―漢籍の利用を中心に―いずれも同『日本古代木簡の研究』塙書房、一九八三年、初出は順に一九七八年・一九七九年、榎本淳一「日本国見在書目録」に見える梁代の書籍について同編『古代中国・日本における学術と支配』同成社、二〇一三年、など。
- (5) 玄昉が『開元釈教録』の入蔵録すべてを入手したわけではなく、したがって「五月一日経」のテキストも『開元録』所載經典のすべてが書写できたわけではなかったことについては、皆川完一「光明皇后願經五月一日経の書写について」同『正倉院文書と古代中世史料の研究』吉川弘文館、二〇一二年、初出一九六二年、山下有美「正倉院文書と写経所の研究」吉川弘文館、一九九九年、山本幸男「玄昉将来經典と『五月一日経』の書写」『相愛大学研究論集』二二・二三、二〇〇六・二〇〇七年、榎本淳一「日本古代における仏典の将来について」『日本史研究』六一五、二〇一三年、などを参照、また漢籍の場合も、最新のものの入手に困難が伴ったことについては、榎本淳一「遣唐使による漢籍将来」同『唐王朝と古代日本』吉川弘文館、二〇〇八年、などを参照。
- (6) 内藤湖南「唐代の文化と天平文化」『内藤湖南全集』第九卷、筑摩書房、一九六九年、初出一九二八年、神田喜一郎「奈良時代に伝来した書籍について」、同「飛鳥奈良時代の中国学」同『神田喜一郎著作集』同朋舎出版、一九八七年、いづれも初出一九二八年、石田茂作「写経より見たる奈良朝仏教の研究」東洋文庫、一九三〇年、小島憲之「伝来書推定の問題」『上代日本文学与中国文学』上（第一篇第三章）、塙書房、一九六二年、東野治之前掲註4「続日本紀」所載の漢文作品、矢島玄亮「日本国見在書目録―集証と研究―」汲古書院、一九八四年、佐藤美知子「憶良の宗教的詩文―『雑集』との関係において―」同『萬葉集の名義と『雑集』―釈靈実・周趙王等の用例から―」同『雑集』の書写状況―憶良の影―」同『萬葉集中における香葉類の歌』いずれも同『萬葉集と中国文学受容の世界』塙書房、二〇〇二年、初出は順に一九八〇年・一九八二年・一九八六年・一九九〇年、大庭脩「日本における中国典籍の伝播と影響」大庭脩・王勇編『日中文化交流史叢書9 典籍』大修館書店、一九九六年、同「聖徳太子と正倉院―古代の伝来典籍」同『漢籍輸入の文化史―聖徳太子から吉宗へ―』研文出版、一九九七年、丸山裕美子「付録 本書で言及する主な医書一覧」同『日本古代の医療制度』名著刊行会、一九九八年
- (7) 山下有美「東大寺の花厳宗と六宗―古代寺院社会試論―」『正倉院文書研究』八、吉川弘文館、二〇〇二年、高橋明子「新羅学生審祥と大安寺―天平期における審祥所蔵經典の管理状況をめぐって―」平成二〇年度上代文学会大会研究報告レジュメ、二〇〇八年五月二五日福岡女学院大学、ただし筆者はレジュメ未見で、報告も拝聴していない。以下の蔵中しのぶa論文注22を参照。蔵中しのぶa「延暦僧録」と大安寺文化圏―「天皇菩薩伝」「居士伝」と平城京の蔵書ネットワーク―」『上代文学』一〇三、二〇〇九年・同b「祇園精舎の投影―東アジアの漢籍におけるスタッタ長者―」河野貴美子・王勇編『東アジアの漢籍遺産 奈良を中心として』勉誠出版、二〇一二年、大平聡「留学生・僧による典籍・仏書の日本将来―吉備真備・玄昉・審祥―」『専修大学東アジア世界史研究センター年報』二、二〇〇九年、遠藤慶太「資財としての書物―写経所の漢籍から―」二〇一〇・二〇一二年度科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書『經典目録よりみた古代国家の宗教編成策に関する多面的研究』（研究代表中林隆之、二〇一三年
- (8) 遠藤慶太前掲註7「資財としての書物―写経所の漢籍から―」など。
- (9) 山下有美前掲註7「東大寺の花厳宗と六宗」、以下、山下の見解はすべてこれ

による。

- (10) 大平聡前掲註7「留学生・僧による典籍・仏書の日本将来―吉備真備・玄昉・審祥―」・蔵中しのぶ前掲註7a「延暦僧録」と大安寺文化圏―「天皇菩薩伝」―「居士伝」と平城京の蔵書ネットワーク」、同前掲註7b「祇園精舎の投影―東アジアの漢籍におけるスタッタ長者―」、高橋明子前掲註7「新羅学生審祥と大安寺―天平期における審祥所蔵經典の管理状況をめぐって」、以下、大平・蔵中・高橋の見解は、すべてこれらによる。

- (11) 堀池春峰「華嚴經講説よりみた良弁と審祥」同『南都仏教史の研究 上 東大寺篇』法蔵館、一九八〇年、初出一九七三年

- (12) 十分に明示されていない部分があるので、前後の文脈より推測するしかないのだが、山下は、I目録の作成経緯について、次のように想定しているのではない。まず、平撰（房）が内裏に対して審詳経を返却請求するために、天平二十年六月一日付けで原「更可請」目録を作成し内裏に渡した。それを受け取った内裏側では、同日ただちに大部分の經典を平撰坊に返却した（ただし内裏は、その後天平勝宝四年十月のⅢ目録で写経所に渡される以前までに、再び多くの審詳経を借り受けた）。一方、平撰房では、写経所からの本経貸し出しの要請を受けて、同じく天平二十年六月一日付けで、平撰房で保管していた内裏宛ての原「更可請」目録の控えを転写する形でI目録を作成し、内裏から返却されてきた審詳経を写経所へ受け渡すための台帳として活用し、經典に添えて渡した。その折りに、写経所側の經典の受け取り状況を示す「請」「請留」などの情報があわせて注記された。大略、以上のごとく理解しているのではなからうか。

- (13) 遠藤慶太前掲註7「資財としての書物―写経所の漢籍から―」に、写経所で書写された漢籍の概要が示されている。

- (14) I 31「密厳經疏」は、智憬が作成した「応写疏本勘定目録」（続々修十二ノ九、大日古十二ノ一二一六）で「在審詳大徳書中」とされたものの一つに該当する。この事例などから、中林隆之「寺院・僧侶の仏典と古代国家」（二〇一〇―二〇一二年）年度科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書「經典目録よりみた古代国家の宗教編成策に関する多面的研究」（研究代表中林隆之、二〇一三年）では、「応写疏本勘定目録」が作成された天平勝宝三年ごろに審詳の所蔵典籍がすでに造東大寺司によって管理されているとみたが、この点は失当であった。I 31は、I目録では「請」「請留」の注記はなされておらず、Ⅱの牒で写経所が貸し出しを要請したものであったが、結局Ⅲまで写経所にはもたらされていない。Ⅲには「請」の注記が付されているので、Ⅲの天平勝宝四年の時点で、紫微中台を介して写経所に入り、その後写経所（造寺司）で管理されたものと考えられる。以上のように訂正する。

- (15) 山下前掲註7「東大寺の花厳宗と六宗」に指摘がある。また、中林隆之前掲註

14「寺院・僧侶の仏典と古代国家」では、寺院と僧侶それぞれの經典の所持と管理、貸借およびそれらの国家的な捕捉のあり方について検討した。

- (16) 堀池春峰「金鐘寺私考」同『南都仏教史の研究 上 東大寺篇』法蔵館、一九八〇年、初出一九五五年

- (17) 家永三郎「東大寺大仏の仏身をめぐる諸問題」同『家永三郎集 第二卷 仏教思想史論』岩波書店、一九九七年、初出一九三八年、山本幸男「華嚴經」講説を支えた学僧たち―正倉院文書からみた天平十六年の様相―「南都仏教」八七、二〇〇六年、なお当該期の内裏での華嚴系の經・論・章疏類の講説については、同「慈訓と内裏―「花厳講師」の役割をめぐって―」『仏教史学研究』五〇―二、二〇〇八年、も参照。

- (18) 堀池前掲註11「華嚴經講説よりみた良弁と審祥」

- (19) 中林隆之「花厳經為本」の一切經法会体制」同『日本古代国家の仏教編成』塙書房、二〇〇七年

- (20) 天平勝宝年間に、花厳宗をはじめとした六宗は、各宗の講説すべき担当經典類の書写を進めている。著名な「僧智憬章疏本奉請啓」（続々修四十六ノ九、大日古十三ノ三六）も、その六宗の所持すべき章疏の書写に関わる書状である。

- (21) 中林前掲註14「寺院・僧侶の仏典と古代国家」

- (22) 堀池前掲註11「華嚴經講説よりみた良弁と審祥」

- (23) このほか、内裏所有の典籍と審詳のそれとが写本系統を異にするために、異本による校正（勘合）の為に借用されたとも論理的には想定しうるが、実際上は、すぐ後に述べるように、内裏がこれらの典籍を天平十九年前後までに所持していたことを示す事例は、註24に示した事例を除いて確認できないので、そうした想定にも無理があることになろう。

- (24) 「天平三年歲次辛未七月十七日書生田辺史」という奥書を有した『新修本草』卷十五の鎌倉期の写本の残巻が仁和寺に現存していることが知られている（前掲註6丸山裕美子「付録 本書で言及する主な医書一覧」を参照）。したがって、天平三年七月までには、少なくとも国家は、『新修本草』卷十五を入手し書写していたものと思われる。しかし、I目録中に『新修本草』二十巻がみられることから推して、原I目録が作成された時点で全二十巻が完本で内裏に揃っていたとは必ずしも言えないと思われる。天平三年までに国家が入手した『新修本草』は、多くの欠本があったか、仮に全巻揃っていたとしても、審詳の所蔵本による異本校正が必要となるような、内容に不備があるものだったのではなからうか。

- (25) 前掲註6の緒論を参照。

- (26) 佐藤美知子「万葉集と中国文学受容の世界」塙書房、二〇〇二年（とくに第二篇山上憶良と聖武天皇宸翰「雑集」に収録の諸論文）、大平前掲註7「留学生・僧による典籍・仏書の日本将来―吉備真備・玄昉・審祥―」、蔵中前掲註7a「延

- 「暦僧録」と大安寺文化圏——「天皇菩薩伝」「居士伝」と平城京の蔵書ネットワーク——同前掲註7b「祇園精舎の投影——東アジアの漢籍におけるスタット長者——」、遠藤前掲註7「資財としての書物——写経所の漢籍から——」などを参照。
- (27) この点については、河上麻由子「古代東アジア世界の対外交渉と仏教」山川出版、二〇一一年、同「唐代における僧侶と対外交渉」「日本史研究」六一五、二〇一三年が、アジア地域全域における仏教の修辭を持つ外交文書の作成・授受や、外交交渉そのものの過程に僧侶が関与し、広義の外交行為を行っていることについて様々に論じている。なお、「師友・同学」関係については、中林隆之「古代君主制の特質と東アジア」『歴史科学』二〇五、二〇一一年、同「東アジア（政治・宗教）世界の形成と日本古代国家」『歴史学研究』八八五、二〇一一年、で論じた。
- (28) これらの医学書については、丸山裕美子前掲註6「付録 本書で言及する主な医学一覽」を参照。また『新修本草』については、註24も参照のこと。
- (29) この点については、河内春人「五——七世紀における學術の流通と南朝文化圏」榎本淳一編『古代中国・日本における學術と支配』同成社、二〇一三年、などを参照。
- (30) 中林前掲註14「寺院・僧侶の仏典と古代国家」、また同「南都六宗から平安諸宗へ——『五宗録』からみた平安前期の王權・国家と仏教」二〇一〇～二〇一二年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書「經典目録よりみた古代国家の宗教編成策に関する多面的研究」(研究代表中林隆之、二〇一三年でも、九世紀以降の章疏類の秘藏について言及した。
- (31) この跋文については、堀池春峰「仏典と写経」同『南都仏教史の研究 遺芳篇』法藏館、初出一九八三年、を参照。
- (32) 天平六年より書写を始めた聖武発願の内裏系写一切経司書写の一切経と、「五月一日経」は、ともに玄昉将来の經典を本經とすることで深いつながりを有していた。この点については、榮原永遠男「天平六年の聖武天皇発願一切経」同「奈良時代の写経と内裏」塙書房、二〇〇〇年、初出一九九四年、を参照。
- (33) なおその後さらに、天平宝字元年(七五七)十一月癸未勅により、国家の學術政策は、天平勝宝度の遣唐使の将来した最新の唐の學術書などをもとにして刷新・拡充される。この点については、榎本淳一「天平宝字元年十一月癸未勅の漢籍について——藤原仲麻呂政権における唐文化の受容——」『史聚』四五、二〇一二年、を参照。
- (34) 山本信吉「聖語藏『大方広仏華嚴經』(新羅写経)」同「貴重典籍・聖教の研究」吉川弘文館、二〇一三年、初出二〇〇六年。
- (35) 小林芳規「角筆文獻研究導論」上、汲古書院、二〇〇四年。
- (36) 『雑集』については、佐藤美知子前掲註6『萬葉集と中国文學受容の世界』と、東京女子大学古代史研究会(丸山裕美子・鉄野昌弘)「聖武天皇宸翰『雑集』」『鏡中積雲集』注解(その一)『続日本紀研究』三二五、二〇〇〇年、を参照。これらの研究によれば、様々な詩集を蒐集して作成された『雑集』の親本自体、機械的に書写した結果の誤字や脱字もみられる部分もあって必ずしも善本とはいえないとされる。ただし聖武の書写姿勢は丁寧で、聖武自身のそれらの古詩への強いこだわりをうかがわせる内容である。
- (37) 東野治之「鳥毛立女屏風下貼文書の研究——買新羅物解の基礎的考察」同「正倉院文書と木簡の研究」塙書房、一九七七年、初出一九七四年、また、同「正倉院文書からみた新羅文物」と同「入唐間における渤海の中継貿易」とともに同「遣唐使と正倉院」岩波書店、一九九二年、初出一九八〇・一九八九年と一九八四年、などを参照。また、日本への書記言語・典籍などを通じた思想・文化の伝播に際して、新羅や渤海との複合的な交流が重要である点については、鈴木靖民「古代東アジアのなかの日本と新羅——文字文化の受容——」同「日本の古代国家形成と東アジア」吉川弘文館、二〇一一年、初出二〇〇七年、も様々な側面から論じている。
- (38) 典籍類については、本稿でみた審詳所蔵典籍のように、将来時点が八世紀前半以前のもので、国内外の様々な条件・環境に規定され、それを国家が掌握・活用するのが八世紀中葉以降に遅れる場合も往々にしてあった。思想・學術・文化の摂取とその内容の咀嚼や活用の問題を検討する場合には、こうしたタイムラグの問題も十分に考慮しておく必要がある。
- (新潟大学人文社会・教育科学系、国立歴史民俗博物館共同研究員)
(二〇一四年一月七日受付、二〇一四年五月二六日審査終了)

Organization of the Knowledge of Japanese Ancient Times, and Buddhist Literature and Chinese Books : Examination of the Catalogue of Additionally Requested Chinese Classic Books and Commentaries on Han Buddhist Scriptures

NAKABAYASHI Takayuki

The Shosoin Archives have a book catalogue (register) dated the tenth day of the sixth month in the year Tenpyo 20 (748) and titled “Catalogue of Additionally Requested Chinese Classic Books and Commentaries on Han Buddhist Scriptures”(hereinafter the “Catalogue”). It contains a total of 172 books ranging from Buddhist literature (translated guides and commentaries on Han Buddhist scriptures) to Chinese books(secular books). Through a brief examination of the production process and content of the Catalogue, this article discovers part of policies to organize thoughts and knowledge in ancient Japan in the mid-eighth century.

The Catalogue includes some of the books belonging to Shinsho, who studied in Silla in the first half of the eighth century. After his death, the collection of books was managed by Hyosho , a disciple of Shinsho and a member of the initial Kegon sect. This Catalogue is a precise copy of the original catalogue of the books of Shinsho which the Dairi (Imperial Palace) borrowed from the monastery of Hyosho. It was made by the monastery and submitted to the Shakyajo (Sutra Copying Office) when asked by Sogo (Buddhist ecclesiastical authority) for the purpose of making a complete inventory and inspection.

Many of Shinsho's books came from Silla. His Buddhist literature consisted of commentaries written by Silla scholars and monks such as Gangyo (Wonhyo). Before the Shakyajo started copying Buddhist guides and commentaries, Shinsho's books were lent to the Dairi for years. Especially, commentaries on Kegon sutras were used for lectures given by the Kegon sect, the leading sect of the six sects of Nara, as well as for determination of the amount of donations. On the other hand, Shinsho's Chinese book collection included a wide range of topics, such as the then latest books of the Tang Dynasty, ancient books after the Nan-Bei Chao period, and military tactics books, which reflected the turbulent situation of East Asia at that time. These books were also borrowed by the Dairi and used for policies to advance arts and sciences.

In the mid-eighth century in Japan, the ancient imperial authority promoted national policies to establish and develop thoughts and knowledge centered on the Buddhism based on the Kegon Sutra. At that time, since they had difficulties acquiring intellectual resources directly from the Tang Dynasty

due to the given international conditions, a collection of books obtained through exchanges with Silla, including those in the Catalogue, played a certain important role.

Key words: Shinsho, Kegon sect (Lotus sect), the six sects of Nara, Chinese books, Silla